

学徒出陣

野々池中学校 三年 中村 萌乃

なかむら もえの

最近の歴史の授業で「学徒出陣」という単語を習った。今まで徴兵猶予されていた学徒にも最後には戦場へ出陣させられた出来事を言うそうだ。しかし私にとってそれは「過去」の出来事であり、覚えるべき「単語」でしかなかったので、大変だったのだろうなとぼんやり思いはしたが、特に心に残ったりはしなかった。たまたまNHK特集「そして、学徒は出陣へ」を見た時、私はとても衝撃を受けた。歴史上の「単語」が、それほど遠くない過去の「事実」としてはつきりとなつきつけられたからだ。そして、こんなことがほんの少し前の日本で起きたものだということがなんだか少し怖くなってきたからだ。

学徒出陣となる以前、明治天皇は「軍国多事の際といえども、教育をおろそかにすべからず」昭和天皇は「国家の発展は学徒の双肩にあり」と言うほど、教育は国の礎だという考えが日本にはあったため、学徒には徴兵猶予がされていた。

徴兵猶予されていた学徒の日記には「人の役に立ちたい、人助けをしたい」など、勉強できる喜びが書かれていた。今では当たり前前の勉強するということが昔はそうではなくて、喜びを感じるほどだったということに、私は少し驚いた。しかし、戦況が厳しくなると東條総理は徴兵猶予を撤廃。すべての学徒を出陣、つまり学徒出陣へ踏み切るのだ。出陣させられた学徒は十万人以上、死者数は未だよく分かっていないという。あんなにも勉強への意欲があつたのに死んでしまった人々のことを考えると、とても悲しくなった。戦時中だったので仕方がないのかもしれないが、そんな風に思いたくはなかった。生まれた時代が違うだけで、私とこの日記を書いた人とは何も変わらない。むしろ、この人の方が勉強したいという気持ちは強かったのではないだろうか。そう考えると、今勉強できる環境にあるのに面倒だ、などと言っている私がとても恥ずかしく、そしてこの人たちに対して申し訳ないと思った。私が意識を変えたからと言って過去の出来事が変わるわけではないが、せめてこの人たちに対して恥ずかしくないうよう、学ぶことを楽しいと思えるようになりたいと思った。

しかし、私が最も衝撃を受けたのは政府内や政府に近い人で学徒出陣に反対する人がいて、にもかかわらずそれを止めることができなかつたという事だ。実は当時、橋田文部大臣と全ての帝国大学の総長が、学徒出陣に反対していた。しかし、戦況が厳しくなつていくと、強く反対する橋田大臣を東條総理はうるさく思い、辞任させる。総長たちもしだいに発言しづらくなつていき、ついに「学業を犠牲にしてもやらなければいけないこと」と態度を変えざるを得なくなつた。橋田大臣辞任の半年後、学徒出陣。たくさんの学徒が特攻や玉砕戦で命を落とした。そして一九四五年、終戦。当時の総長たちは責任を感じ翌年までに全員が辞任、橋田元大臣は「何度生まれ変わつても日本の学びの道を守りたい」という言葉を残し、自殺した。私は、戦争の時代にこのような考えの人たちが政府の中にいたことに驚いた。てつきりこの時代は、学業などしている場合ではないという考え方しかないだろうと思つていた。しかし実際は学徒や日本の未来を考え、意見を言い、それでも守り切れなかつたことに大きな責任を感じた人がいたのだ。みんなの意見と違うことを言うのはと

ても勇気が要ることだと思う。私だったら、周りの意見に流されて自分の考えも変わってしまうだろう。しかしこの人たちは、学問が未来のために必要だと信じ続けていた。しかし戦争ムード一色だった国民はこの意見を批判した。とてもつらかっただろう。それでも、確信もないのにどうしてここまで頑張れたのだろう。考えたけれど、私には分からなかった。

終戦から七十七年、私は戦争の頃を知らないし、経験した人ももう少なくなってきた。ほとんどの人が以前の私のように戦争で起きた出来事を「単語」として受け取っているのではないだろうか。確かに、第二次世界大戦などはもう過ぎた過去の話だ。しかし、戦争を通して学べることもつとあると私は思う。今回の学徒出陣の話で、私は今までは国民側の目線でしか見ることがなかった戦争を、政府側の目線で見ることができた。すると、一度戦争ムードになると拍車がかかったように一つの目標へ向かって他の意見が見えなくなってしまう国民の姿を客観的に見ることができた。そういうところから見ても、やはり戦争は良くないものだと思うし、それと同時にこれは現在にもつながるものではないかと感

じた。歴史は、過去の出来事を未来へ生かすために習うものだ。過去の「事実」をもっとたくさんの人に知ってほしいと思う。